
マーメイド

壇 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マーメイド

【Nコード】

N2670D

【作者名】

壇 敬

【あらすじ】

良平と佳代子の、恋の物語。高校生で出会い、大学で付き合い、社会人になって将来を誓ったふたりの行く末は？海にこだわった彼女の存在は何だったのか。良平の視点から描写しました。

君がいた夏

高校１年生の夏だった。

僕は伯父の家で夏休みを過ごしていた。

もちろん、勉強というのが理由だった。

だが、子どものいない伯父さんと伯母さんは、僕を息子のように扱った。

だから、勉強していようがまいが、それ程関係なかった。

それで、毎日僕は近くの海に行って泳いでいた。

自分でもよく飽きないなあと、感心する程だった。

ある日、シュノーケリングをしていたら、ビキニの女の子が泳いでいるのを見掛けた。

だが、僕はあまり関心がなかった。

南の島の海の美しさに魅了されていたからだ。

海の色はエメラルドグリーン。

海水の透明度は、１０ｍ以上あった。

こんな海は、都会では考えられなかった。
泳ぐだけで満足だった。

「こんにちは」

浜で休んでいると、女の子が声を掛けてきた。

「い、こんにちは」

僕は、ビックリしてちよっともった。

彼女は、さつき海で見掛けた、ビキニの女の子だった。
ビキニの柄がボーダーなのを憶えていたからだ。

「ここの海はキレイね」

そう言つて、彼女は僕の横に座つた。

「そうだね。毎日潜つていても、飽きないよ」

僕は、海を見ながらそう言つた。

「さつき、泳いでいたのは君？」

僕の問い掛けに、彼女は答えた。

「ええ、そう。君は地元の人なの？」

彼女は質問で返した。

「いや、僕は東京なんだ。伯父さんちで、ホームステイ」

「君は？」

彼女は砂に丸を描きながら答えた。

「私も東京から来たの。家族旅行なの」

「いつまでいるの？」

僕が今度は答えた。

「夏休みいっぱい。つまり8月末まで」

「君は？」

彼女が答えた。

「私は、先週から来てるの。あと10日間はいるわ」

「山の中腹にある別荘にいるの」

会話はここで途切れた。

午後の太陽がジリジリと肌を焼く。

「暑いな。泳ごうか」

「うん」

ふたりは、旧知の友達のように仲良く泳いだ。

陽も傾いて、僕と彼女は別れた。

翌日、同じ時間に泳いでいた。

彼女も昨日同様に、泳ぎに来たようだった。

「こんにちは」

彼女が話しかけてきた。

ぼくもシュノーケルを外してあいさつをした。

「こんにちは」

僕らは然したる会話もなく、ただ一緒に泳いだ。

そして、一緒に浜辺で休憩した。

夕方には、それぞれの家に帰っていった。

そんなことがしばらく続いた。

その日浜で休んでいると、彼女が切り出してきた。

「私、明日帰るの」

僕は、ビツクリもしなかった。

あの日、あと10日間だと彼女が言っていたから。

「あれからもう10日も経つんだ」

彼女は砂に丸を書きながら言った。

「ねえ、名前を教えて。私は佳代子」

「君は？」

僕はちよつとぶつきら棒に答えた。

「良平」

彼女はクスリと微笑んだ。

僕はちよつと照れて言った。

「可笑しいか？」

彼女は、真顔で言った。

「うつん、そうじゃないの」

「そう言えば、名前も知らなかったなって」

「あ、そうか」

「全然気が付かなかった」

彼女はおもむろに立ち上がった。

「私、もう行くわ。楽しい夏をありがとう」

そう言つて、右手を差し出した。

ぼくも右手を差し出した。

そして、握手をした。

彼女が強く握つてきた。

僕も強く握り返した。

「それじゃ、ね」

そう言つて彼女は駆けて行つた。

僕はその後姿をジーツと見送つた。

翌日、彼女の姿はもうなかった。

海に潜つたが、海の中にもいなかった。

太陽はまだ、ジリジリとしていた。

その夏、君がここにいた。

いつか、どこかで、僕のマーメイド。

君がいた夏（後書き）

淡く切ない恋の流れを書きました。
感想などありましたら、お聞かせくださいませ。

君といた夏

大学に入った年、僕は大学のオーケストラに入った。

僕が多少喇叭が吹けたのを友人が聞き付けた。

その友人の友人に半ば強引な勧誘を受けて、クラブに入部したのだった。

そのオケの新歓コンパで、僕は佳代子と再会した。

「良平くんじゃない？」

飲まされてかなり酔っていた僕に、佳代子は後ろから声を掛けてきた。

「ふあい、良平は僕れすが。どちら様れしょうか？」

佳代子は僕の肩を叩きながら言った。

「佳代子よ、佳代子」

僕は首を傾げていた。

「かよこお？」

佳代子は僕の背中を叩いて更に言った。

「夏の海を忘れちゃったの？」

僕は叩かれた拍子にひざまずき、そのまま吐いてしまった。

「きゃー！ ごめんごめん」

佳代子が、慌てて介抱してくれた。
悲惨で、最悪な再会だった。

翌日、目が覚めた所は自分の部屋でなかった。
明らかに女性の部屋だった。

僕が起きたのを察して、女の人がこちらに近づいた。

「気分はどう？ 大丈夫？」

僕は声を聞いて、昨日のおぼろげな記憶をひも解くことができた。
佳代子は、オケの先輩で、僕と同じ大学の2年生だった。
慌てて、お詫びをした。

「昨日は済みませんでした」

佳代子は笑顔で答えてくれた。

「大丈夫そうね。昨日のことはちゃんと憶えていたのね」
「じゃ、夏の海もちやんと憶えてる？」

酒の抜けた、今の僕はちゃんと思いついた。

「3年前の、南の島の海ですよね」

佳代子は嬉しそうに言った。

「そう、そう！ 憶えていてくれたのね」

佳代子は嬉しそうに朝食を準備した。

それから僕たちは急に親しくなり、クラブの帰りはいつも一緒だった。

佳代子は「汚いんでしょ」と言っでは、時々僕の部屋を強引に掃除してくれた。

「ちゃんと食べてる？」と言っでは、部屋に呼んでご馳走してくれた。

クラブでは「付き合っている」と公認されてしまった。

試験が終わって夏休みを前にした頃、クラブの帰りで一緒に食事をした。

その時に、佳代子は話し始めた。

「夏休みに入ってオケの演奏会が終わったら、あの島に行かない？」

僕には、なんとなく予感があった。

佳代子がいつ、そのことを言うか、待っていた感じだった。

「うん、行こう」

僕は自分でも驚くほど素直に言葉が出てきた。

「それじゃ、決まりね」

島に着いた日、伯母さんに出会った。

「良ちゃん、大きくなったわね」

「そちらの方は？ … あら、野暮なこと訊いちゃったわね」

「良ちゃんも、もうそんな歳なのね」

「あ、そう、彼女の別荘に泊まるの」

「こつちにも顔出しておくれよ」

「お嬢さん、是非寄ってくださいな」

佳代子の別荘は、少し登ったところにあった。
浜までは少し距離があった。

暑い日差しが、浜を熱くしていた。

佳代子は、あの時の水着を着ていた。

「どうかしら？」

僕は、佳代子が眩しかった。

「暑いな、泳ごうよ」

佳代子は少しムツとした。

「変わってないとか、素敵だねとか」

「何か言ってよお！」

佳代子は僕と泳いだ。

あの時と同じだった。

あの時に戻ったようだった。

何日かが過ぎて、伯父さんの家に行った。

伯母さんが、佳代子に浴衣を用意してくれた。

「私の若い頃のだけど、どうかしらね？」

伯母さんが佳代子に着付けしてくれた。

「どうかしら？」

ふすまを開けて入ってきた佳代子に、しばし見とれた。

「き、綺麗だよ！」

佳代子は微笑んで言った。

「ありがとう」

浴衣姿の佳代子と甚平姿の僕で、夜の海岸を散歩した。
浜辺に腰を下ろして、僕は佳代子の肩を抱いた。

「好きよ」

「好きだ」

夏の熱い空気が浜風で冷やされてゆく。

その夏、君とここにいた。

今、ここで、僕のマーメイド。

君のいた夏

夏が来ると思い出す。

佳代子と行った、あの南の島の海を。

佳代子が卒業しても、僕が卒業しても、僕と佳代子は付き合いを続けていた。

大学時代に再会してから、

「夏になったら、あの南の島に行く」

という僕と佳代子の過ごし方も続けていた。

どんなに忙しくても、互いに連絡を欠かさず、週に1度は必ず逢った。

本当に、皆が羨むような仲だった。

僕は佳代子だけ、佳代子は僕だけ、お互いだけしか見えていなかった。

就職して5年、僕に辞令が出た。

それは、ニューヨーク勤務だった。

僕は、すぐに佳代子に話した。

佳代子は喜んでくれた。

「凄いいじゃない！ おめでとう」

ずっと胸の中に暖めていたことを、このことと一緒に、僕は佳代子に言った。

「佳代子、僕と結婚してほしい。そして、ニューヨークに付いて来てくれ」

佳代子は迷わなかった。

「うん、解ってるわ。ニューヨークへ一緒に行くわ」

それから慌ただしかった。

両親や会社への挨拶、式の段取り、忙しかったが、順調に進んだ。僕と佳代子は幸せだった。

そんな忙しい、夏の日のことだった。

佳代子がこんなことを言い出した。

「ねえ、しばらく日本に帰れないでしょ」

「だから、あの島に行っておかない？」

僕は、何の気無しに答えた。

「そうだね。でも、いつ行くの？」

佳代子はアケツラカンと言った。

「明日から」

僕はビックリした。

確かに、僕は長期休暇を取ったし、佳代子は既に退職している。時間的に問題はない。

佳代子の要求は性急だったが、僕は佳代子の要望を受け入れた。

佳代子の眼が何かを訴えている、そう思ったからだ。

島に着くと、伯父さんと伯母さんが出迎えてくれた。

「良平、結婚おめでとう」

「良ちゃん、おめでと」

「この人と一緒になるんだね、やっぱり」

「わたしや、嬉しくて、嬉しくて……」

伯母さんは泣きじゃくって言葉にならなかった。

日差しが暑いのは、今も変わらなかった。

僕と佳代子は、いつもの浜にいた。

佳代子はまだ、例の水着を持っていた。

ボーダーのビキニを。

僕は半ば呆れ気味に言った。

「佳代子はいつもそれなんだね」

佳代子は切なそうに言った。

「私の大切なスタイルですもの」

「私の『私たるもの』かも知れないわ」

佳代子はそれを着て、一緒に泳いだ。

手をつないで、一緒に。

マスク越しに僕と佳代子は見つめ合った。

その時、一瞬の潮流が僕と佳代子を襲った。

その後、どこをどう泳いだか分からないが、僕は何とか浜に着いた。しかし、佳代子の姿が見当たらなかった。

しばらく待っていたが、佳代子が海から上がってくる様子がなかった。

僕は、もう一度海に入って佳代子を探した。海の中に、佳代子の姿はなかった。

島の人達が3日間総出で捜索をしたが、佳代子の手懸りさえ出てこなかった。

1週間が過ぎ、佳代子の捜索は打ち切られ、佳代子の扱いは行方不明となった。

その後僕は、単身でニューヨークに旅立った。

僕は、3年間のニューヨーク勤務、4年間のロンドンの勤務を終え、日本に帰ってきた。

あれから7年、家族から失踪宣言が出され、佳代子の死亡が認定された。

帰国後、僕はすぐに島に向かった。

伯母さんが出迎えてくれた。

「良ちゃん、よく来たね」

「佳代子さん、まだ見付からないよ」

「思い出す度に悲しくて」

伯母さんは静かに涙を落とした。

僕は、あの浜に行ってみた。

初夏の日差しを受けて、海の色はエメラルドグリーンだった。
何もかも、あの頃と変わっていなかった。

「佳代子…」

「僕は忘れないけど、さよならを言っよ」

僕は区切りを付けたかった。

僕は静かに水面を眺めていた。

その夏、君のいた海がここにある。

あの時、この場所で、僕のマーメイド。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2670d/>

マーメイド

2010年10月10日20時11分発行